

可仕由被仰聞候。

〔御觸書集覽^三〕天保十二丑年十二月廿八日

谷中天王寺門前町喜八店髮結職

幸次郎

其方儀幼年之節より、父母之申付を不相背、萬事物靜成性質ニ而、十貳才之節、西久保青龍寺門前町髮結勝五郎弟子ニ相成候處、月々無情怠、兩親之機嫌聞に罷越、土產物等持參爲悅、其後年季明谷中古門前町髮結床主竹次郎方同居、廻り髮結致し、壹ヶ月髮結錢拾五〆、五百文集メ候内、四〆五百文ヅ、毎月竹次郎江揚錢差出し、殘錢之内、本郷新町屋ニ罷在候兩親江月々五百文、或金貳朱ヅ、相贈候處、兩親共病身ニ而難澀いたし候ニ付、谷中古門前町ニ而店借受、母美代を引受繼父喜助儀者、同人弟岩次郎引取候ニ付、其方儀毎朝未明ニ起、食事拵等いたし置、職業ニ出、晝飯も立歸り、同様世話いたし爲給、夕刻歸り候節ハ、日々母美代好候品を調持歸り爲給、毎夜按摩等致し遣し〇中一途に孝心を盡し候段、奇特成儀ニ付、爲御褒美銀三枚被下候間、難有可奉存、右之通、今日於北御番所被仰渡候間、勸善之教等ニも相成候間、自身番屋江張置候様可致事、

丑十二月廿八日

〔嘉永明治年間錄^三〕安政元年七月十二日、江戸本郷元町鐵五郎女ニ、銀ヲ賜テ孝行ヲ褒ス、

本郷元町家主鐵五郎娘やす、當寅十四歲、其方儀常々孝心深く何事に不寄、兩親の意に不背其上、去丑五月十九日、曉磯吉外二人押込、兩親を取卷、金銀可差出、若し隱置候は、兩人共可切殺と拔刀を以て申威し、鐵五郎差出候錢可奪取と致し候節、磯吉外二人の袖にすがり、兩親を助け、吳候様相歎き、且父儀は兼て困窮にて、日々青物商ひ致し、漸々取續居候間、右賣溜錢奪取られ候ては、明日より商ひに基手を失ひ、及渴命候間、差免吳候様申歎候故、流石の強盜も其孝心を感じ、盜不致立去候趣、無相違相聞え、右體其身の危を忘れ、刃下に臨み道理を述べ、惡黨共の氣勢を奪ひ、